

北岡伸一著「独立自尊—福沢諭吉の挑戦—」中公文庫、中央公論新社、2011 年 2 月 25 日刊を読む

独立自尊—福沢諭吉の挑戦—

1. (1) 大病以後、福沢はほとんど執筆は出来なかった。その中で最後に取り組んだのが、「修身要領」の作成である。福沢は側近に語って、「旧道徳は力を失ったが、新しい道徳はまだ現れていない、近年社会の風潮も乱れもそれに関係する、現在の時勢に適した徳教の標準を示すべきだ」として、周囲にその案を作らせた。それが「修身要領」である。

(2) それを貫く思想は、「独立自尊」であった。小幡は先生の日ごろの言行を表すのにこれよりふさわしい言葉はないとして、多くの賛成を得た。福沢が「独立自尊」という四字を使ったことは、実にこれまであまりなかったが、福沢をもっともよく知る小幡はこの言葉を選んだ。
2. 「修身要領」は前書き以外に 29 項目が箇条書きになっているが、そのうち 17 箇条に「独立自尊」という言葉が使われている。

(1) 第 1 に、「人は人たるの品位を進め智徳を研ぎますますその光輝を発揚するを以て本分と為さざるべからず。吾が党の男女は独立自尊の主義を以て修身処世の要領と為し、これを服膺^{ふくよう}して人たるの本分を全うすべきものなり」と述べられていて、独立自尊が主題であることを明らかにしている。

(2) また第 2 においては、「心身の独立を全うし自からその身を尊重して人たるの品位を辱めざるもの、これを独立自尊の人という」、

(3) 第 3 に「自から労して自から食うは人生独立の本源なり。独立自尊の人は自労自活の人たらずるべからず」という風に、冒頭にたたみかけるように「独立自尊」が強調される。

(4) それは、男女関係でも、子女の教育でも重視され、さらに成人してからの自己教育でも強調される。

(5) たとえば第 12 に、「独立自尊の人たるを期するには、男女共に成人の後にも自から学問を勉め知識を開発し徳性を修養するの心掛を怠るべからず」とある。

(6) そして独立自尊は、社会の構成原理としても重視される。

(7)第 13 に「一家より数家次第に相集まりて社会の組織を成す。健全なる社会の基は一人一家の
独立自尊に在りと知るべし」、

(8)第 14 に「社会共存の道は、人々自から権利を譲り幸福を求むると同時に、他人の権利幸福を
尊重して^{いやしく} 苟 もこれを犯すことなく、以て自他の独立自尊を傷つけざるに在り」、

(9)第 16 に「人は自から従事する所の業務に忠実ならざるべからず。」その大小軽重に論なく^{いやしく} 苟
も責任を怠るるものは独立自尊の人に非ざるなり」、

(10)第 17 に「人に交わるには信を以てすべし。己れ人を信じて人を亦己れを信ず。人々相信じて
始めて自他の独立自尊を実にするを得べし」などがそれである。

(11)そしてそれは国会においても重視される。

(12)第 24 に「日本国民は男女を問わず、国の独立自尊を維持するが為には、生命財産を賭して敵
国と戦うの義務あるを忘るべからず」、しかし他方で、

(13)第 26 には「地球上立国の数少なからずして各その宗教言語習俗を殊にすと雖も、その国人は
等しくこれ同類の人間なれば、これと交わるには苟も軽重厚薄の別あるべからず。独り自ら尊大
にして他国人を蔑視するは独立自尊の旨に反するものなり」とある。

3. (1)かつて『文明論之概略』において、福沢は「智徳の進歩」を説いた。その努力は徳よりも智
に向けられていた。しかし智が一段落したところで、徳の方向に向かったのは当然であった。
『自伝』においても、「日本人を高尚に赴かせたい」と述べている。しかして、智と徳とを貫
いていたのが、「独立自尊」であったのである。

(2)この「修身要領」の中に、『学問のすゝめ』『文明論之概略』その他の福沢のさまざまな主
張が、当時は文明開化を進めるための主張として展開されたものが、晩年のここに、ふたたび、
今度は個人の道義という形で展開されている。

(3)福沢においては、智徳は同根であったのである。

P307 ~ 309

[コメント]

福沢諭吉先生の「独立自尊」とは何かが、国際大学学長の北岡伸一先生の手によりわかりやすくま
とめられている。「独立自尊」の考えは「智」と「徳」の根源にある根本思想といえる。

— 2014 年 1 月 23 日 林 明夫記 —

